

研修分科会

テーマ【目録世界の新たな動向】の概要

古本屋をうろろうして思うのは、感を頼りに探している本を見つけるのは、至難の業だということです。元来、利用者と資料を結ぶ重要な機能である**目録**は、図書館の中心的業務でした。図書館に求められる機能が多様化しても、また、整理業務をアウトソーシングして専任の手から離れても、その事に変わりはありません。

目録の原点に立ち返って、利用者の観点で「書誌的記録の機能要件」の概念を明示したのが、IFLAによって1997にまとめられた**FRBR**です。国立国会図書館が翻訳*してくれていますので、是非一読してみましょう。次期AACRは、RDA(Resource Description and Access)と呼ばれ、このFRBRモデルを意識して策定が進められるはずのようです。

また、今後の目録を考えるには、**利用者の視点**から、図書館の世界にとどまらず、インターネットの**情報環境**の中での検索行動を捉える事が、図書館目録が生き残るために重要です。国立情報学研究所が発表した『次世代目録所在情報サービスの在り方について』も、そのような状況を反映したものですし、これからの**OPAC**にも活かされなければなりません。

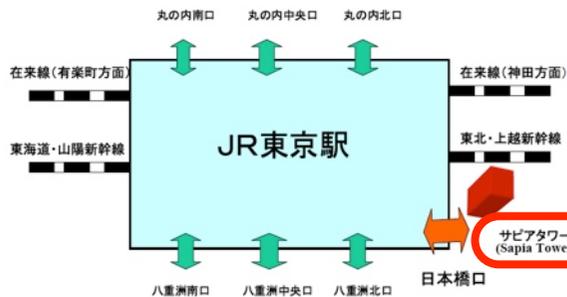
今回のグループ討議は、講演内容を**図解****によって整理するとともに、事前課題の集計結果を元に、現在の状況と将来の展望を考える時間にしたいと思います。できれば、下記の資料も読んでおきましょう。

*「すばらしいFRBRの世界」第4版 www.ndl.go.jp/library/data/bnfw4_japanese.pdf

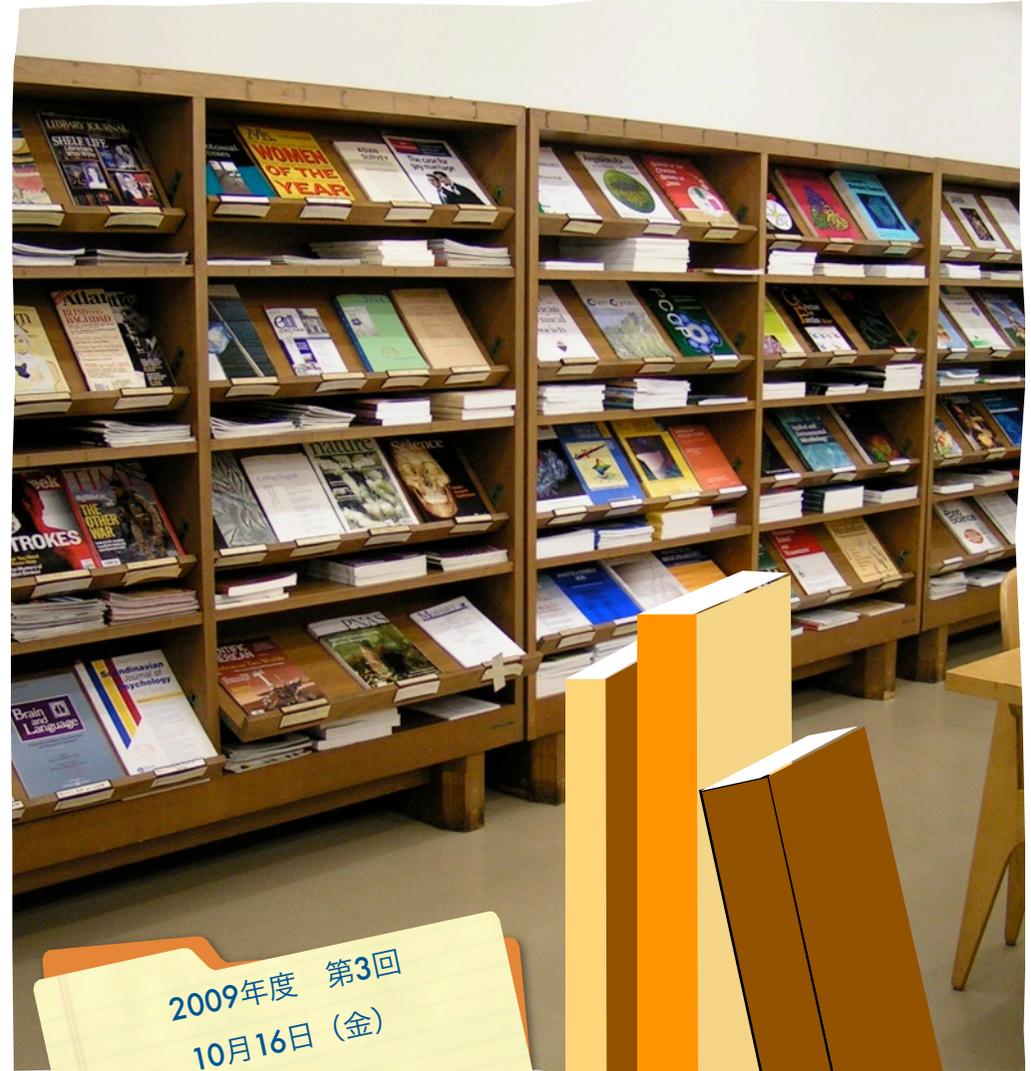
**久恒啓一「図で考える人は仕事ができる」等、図解の利点・技術に関する資料

懇親会

前回の懇親会は、講演者と幹事校の宮川氏にもご出席いただき、ご参加された皆さんに大変好評でした。今回からは、会員の皆様の中で企画していただきたいと思います。どなたか、懇親会幹事をお願いします！ サピアタワーの周辺には、予約なしでも可能な店がいくつもあるようです。ふるって幹事お引き受けください。



会場：埼玉大学
東京ステーションカレッジ
〒100-0005
東京都千代田区丸の内1-7-12
JRサピアタワー9階



2009年度 第3回
10月16日 (金)
テーマ：目録世界の新たな動向

第3回 目録世界の新たな動向

研修分科会 第3回 2009年10月16日 (金) 13:00-17:00

事前の課題 その1 締切：10/9 (金)

1) 『次世代目録所在情報サービスの在り方について (最終報告)』を
読んで、感想文を200字程度にまとめる

http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/archive/project/catwg_last.html

2) 自館のNACSIS-CATへの所蔵登録率を調べる

3) NACSIS-CATに書誌レコードがなかった時の自館の対応を調べる

4) 1)の報告で述べられている「共同分担方式の最適化に向けた見直し」
の方向性と検討結果が具体化された場合、自館はどう変わるか考える

事前の課題 その2 締切：10/9 (金)

1) 林賢紀 OPACの使われ方を変革する 図書館雑誌 103(6)
p.387-389 を読んで、感想文を200字程度にまとめる

2) 1)の論文をふまえ、自館のOPACの特徴を調べる

★課題は所定の用紙に記入

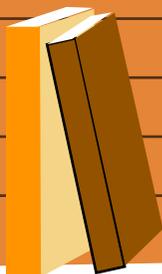


グループ討議

「NACSIS-CATと参加館の関係モデル」または「利用者とOPACの関係モデル」を図解する

time table

1:00-1:10	第3回テーマの主旨/事務連絡
1:10-2:30	平田義郎氏講演
2:30-2:40	休憩
2:40-4:00	林賢紀氏講演
4:00-4:30	グループ討論
4:30-4:50	発表とまとめ
4:50-5:00	アンケート記入



【1】講演



「次世代目録所在情報サービスの在り方について」と最近の目録の動向について

平田義郎氏 (ひらた・よしろう 国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 図書館連携チーム NACSIS-CAT担当係長)

[概要]

目録所在情報サービス (NACSIS-CAT/ILL) は、運用開始から二十数年を経過し、大学図書館等において欠かすことのできないサービスとなった一方で、様々な問題点も指摘されている。国立情報学研究所では、これら問題点について検討を行い、「次世代目録所在情報サービスの在り方について (最終報告書)」を取り纏めた。本講演では、この報告書を解説すると共に、それを取巻く最近の目録の動向について紹介する。

【2】講演



インターネット時代のエンドユーザーサーチとこれからのOPACのあり方

林 賢紀氏 (はやし・たかのり 農林水産研究情報総合センター)

[概要]

国内においてインターネット経由でOPACが検索できるようになって15年余り。この間、amazonに代表されるオンライン書店の台頭やネットの全てを飲み込んだとするGoogleの展開など、検索環境としてのインターネットは大きく変化を遂げてきたが、一方でOPACはどうであったか。技術的な側面を中心にこの15年の変化を追うほか、これからのOPACはどのようなサービスとなるのかについて考えるきっかけとしたい。